

令和5年度大学・附属学校園連携事業推進経費 成果報告書

|                              |  |
|------------------------------|--|
| <p>所属名</p>                   | <p>表現活動教育系</p>   |
| <p>研究課題名</p>                 | <p>土粘土の特性を生かした授業実践</p>   |
| <p>研究課題概要</p>                | <p>本研究課題では、自然素材である「土粘土」を材料とし、幼稚園児、小学生を対象に造形活動を展開した。その目的は、児童が土粘土の特性を生かした活動を通して、手や体で感じる体験学習から得る学びを明らかにすることである。土粘土は、可塑性に優れ、手で容易に形を変えることができるので年齢を問わず取り組みやすく、立体表現に適した材料である。しかし、様々な理由から幼稚園、学校現場で積極的に使用されているとは言えない状況が続いている。</p> <p>土粘土は含まれる水分量によって硬さ、状態が異なり触覚的にも視覚的にも変化する。さらに焼成することで大きく変化し、“やきもの”として日常生活で使う喜びも味わえる。触覚の持つ特性は子どもの感性の育ちにとって非常に重要な意味を持っているが、今日の子どもを取り巻く環境において、この重要な感覚による経験ができる状況が少なくなりつつあり、幼稚園やや小学校での取り組みは重要であると考えた。</p> <p>幼稚園では、1年を通し4つの活動に取り組んだ。5月には体全体を使った活動ができるよう十分な量の土粘土を用意し、自由に遊んだ。土粘土を自分の好きな形に操作できる喜びを感じることを目的とした。園児は友だちと協力して重たい土粘土の塊を運んだり、足で踏み潰したり、また手で細かい飾りをつくったりと活動は多岐にわたった。7月には土粘土の状態を変化させる活動に取り組んだ。乾燥して硬くなった土粘土を砕き、篩にかけてサラサラにし、水を加えてドロドロにする活動である。ここでは、その状態の変化に伴う触覚の変化を全身で感じ、土粘土の柔らかさが水分量によって異なることを経験した。11月には3週にわたって小学校4年生の児童と一緒に約1tの土粘土で遊んだ。土粘土の量が5月の活動より増えたこと、小学生の力を借りることができたこと、3週間のうちに土粘土が少しずつ硬くなっていったことにより、5月に行った遊びとは異なる活動の展開が見られた。そして12月には卒園記念として陶芸に取り組んだ。施釉も園児が行った。いつも遊んでいた土粘土を焼成することを疑問視するような声も聞かれた。土粘土は自由に形を変えて遊ぶものという思いが大きかったものと推測される。反面、完成品を目の前に、硬さや色、質感が大きく変化したことに驚き、何を入れようかなどと使い方を楽しむ様子が伺えた。</p> <p>小学校では、4年生は上記の通り園児と一緒に活動した。園児の自由な活動に触発され、普段より活発に行動する児童が多く見られた。また、5年生が陶芸に取り組んだ。5年生は昨年度、1年を通して土粘土を使った造形活動に取り組んだ経緯がある。園児が取り組んだ「乾いた土粘土の状態を変化させる活動」も経験している。その為、土粘土の扱いには慣れており、作りたいものを作れると考えた。土粘土の扱いを分かってはいても、釉薬を施すこと、焼成することによる変化が理解できるかどうか不明であったため、土粘土で形を作る活動以降の工程は、動画で撮影し、説明を加えた。完成後にアンケート調査を行い、作りたいものをつくれたか、その満足度と、やり直すとすればどうしたいか、振り返りによる児童の気づきや探究する気持ちについてまとめた。</p> |
| <p>研究課題の構成員<br/>(リーダーに※)</p> | <p>谷村 さくら(以下表現活動教育系)※<br/>佐藤 賢司<br/>ピオルコフスキー 潤(附属平野小学校)<br/>吉永 純子(附属幼稚園)</p>   |